

ブルックス記念碑の除幕

去る十月四日、東区北十三条西十六丁目にある札幌村郷土記念館で、ウィリアム・ペン・ブルックス(一八五〇―一九三八年)を記念する碑の除幕式がありました。地域の方々が列席されたほかに、札幌市や商工会議所、在札幌米国領事館からの来賓を迎え、さらにブルックスのご子孫もアメリカからWEB参加をされてメッセージを届けられました。

「札幌村」は、札幌周辺のうち近代に最も早く和人が入植した地域です。幕末の一八六六年、幕府の蝦夷地統治機関であった箱館奉行が、配下の太友龜太郎に差配を命じた開墾地「御手作

場」を起源とし、維新政府が開拓使を設置した後、札幌本府の建設と並行して札幌村への入植が拡大していきます。近代的な都市としての札幌は、開拓使が行政都市として建設した中心市街部に始まりますが、「市街」に對する「郊外」の成り立ちとして、札幌村の地域形成も歴史の重要な要素です。

札幌村のタマネギ生産

札幌村では、一八八〇年ころからタマネギの栽培を始めました。当時、札幌農学校教授であったブルックスが直接、その栽培法を指導しています。札幌村



ブルックス肖像写真 (1879年、大学文書館蔵)

が栽培に力を入れたのは、ブルックスがアメリカから移入した「イエロー・グローブ・ダンヴァース」という品種です。ブルックスは、札幌農学校の「農学」の講義で、ダンヴァース・オニオンについて、「マサチューセッツ州の同名の町が原産地で、大粒で厚みがあり、黄色で風味がよく、生産性が高い。早熟で、日持ちがよく、園芸栽培に適している」と説明し、北海道の地味に適合すると評価しています。札幌村は、イエロー・グローブ・ダンヴァースの栽培方法に工夫と改良を重ね、「札幌黄」という銘品に育て上げます。一時、札幌黄は他の品種に押されてあまり目にしなくなりましたが、近年、再び脚光を浴び、現在は札幌伝統野菜として道外にも知られるようになっていきます。地域産業の興隆の歴史の出発点にブルックスが一枚噛んでいたわけです。

ブルックスが担ったこと

ブルックスは、札幌農学校開校から五ヶ月後の一八七七年二月に札幌農学校教授に着任し、同年四月に離任した教頭W・S・クラークの仕事の多くを引き継ぎました。ブルックスの仕事で最も重要なのは、札幌農学校の附属農場である農校園の管理責任者として経営に当たったことです。クラークは、学生が農業を実地に学ぶことの重要性を強調し、学校附属の農場が不可欠であると主張しました。設置した農校園の責任者には、マサチューセッツ農科大学時代の教え子であるブルックスに白羽の矢を立て、経営を託しました。ブルックスは海外から様々な農産物の多様な品種を移入し、農校園で試作し、その試作には農学校生を参加させて実地に農業技術を学ばせました。栽培成績の良い農産物を農業関係者に広く紹介し、さらに農産物の流通・販路の形成も提言しています。

札幌農学校第二期生の新渡戸稲造は、恩師ブルックスについて、学理に深く通じているわけではなく、弁舌も手な方で、文才にも乏しかったとユーモアを交えて回想しています。しか



新渡戸稲造が記録したブルックス「農学」講義の受講ノート (1880年、大学文書館蔵)

し、批評すべきはそこではないと強調します。試験問題で果樹運搬に用いる縄の直径を問う、講義では農具を使用するときの指の捻り方や節の曲げ方まで説明して、「百姓になるには、かくばかり困難に及ぶものか」と学生たちを悩ませつつ、農業に従事する卒業生には「ブル」先生の講義は、まことに有益と言わしめる、そうした「実業に方(あた)りたる事蹟」こそ評価すべきだと、新渡戸は述べています。

札幌村郷土記念館は、ブルックスも関わったタマネギ生産に関する資料を展示しています。新たなモニユメントの建立を機に、ブルックスの事蹟を改めて見直したいと思います。